

2009 年度 研究開発戦略説明会 質疑応答メモ

日 時 : 2009 年 4 月 17 日 (金) 15 : 00~16 : 10

場 所 : 株式会社富士通研究所 岡田記念ホール

説明者 : 株式会社富士通研究所

代表取締役社長 村野 和雄

IT システム研究所 所長 森下 哲次

ネットワークシステム研究所 所長代理 福田 英輔

質問者 A

Q: LTE について、基地局の周りにリピーターを置くことで電波の干渉が増えると思いますが、どのように制御するのでしょうか？

A: リピーターを置くことで干渉は増えますが、どの周波数を使うか、また、基地局より周波数の拡がりを絞る事で、電波の干渉を抑えていきます。この技術は、既に WiMAX でも標準化された技術であり、LTE でも展開できる技術であると考えています。

Q: 基地局のカバー範囲はどの位でしょうか？

A: このシミュレーションでは、半径 600m 程度の小さな範囲で行っていますが、LTE 自体は最大で 15km 位までカバーできる仕様となっています。

Q: LTE と WiMAX はどちらが優位なのでしょうか？

A: LTE の仕様は、3G の規格を作っている 3GPP というところで策定しているので、既存ネットワークとの親和性が高く、移行が非常に簡単です。一方 WiMAX は、LTE と比較しビットレートなどで一部性能に制限がありますが、共に OFDM という技術を使っており、基本的には大きな差はありません。既存でサービスを行っている通信キャリアは LTE、今後新たにサービスを始めたいと考えている通信キャリアは WiMAX、とキャリアの展開によって採用する技術は異なってくると思います。

Q: LTE のスループットはどうなるのでしょうか？

A: フィールド実験の説明の中で最大 240Mbps のスループットと説明しましたが、それはあくまで端末が一台の場合です。実際は、端末の台数や端末の要求するスループットによって、大きく変わります。

質問者 B

Q: LTE に関して、富士通はドコモと実証実験などを実施していますが、海外のキャリアとの実証実験の実績や予定、もしくは基地局納入の予定はありますか？

A: 海外のキャリアとも LTE 関連ビジネスの話はいくつかありますが、現時点で公表できるものはありません。

質問者C

Q: クラウドコンピューティングの実現に関する説明にありました、「仮想プラットフォーム」のイメージを詳しく教えてください。

A: クラウドでは、サーバや IDC が分散し、いろいろなサーバやソフトウェアをネットワークでつないでいます。その上、コンピュータパワーやストレージ、アプリケーション含めて、利用者が必要な時に、必要なだけリソースを使えるようにする事がサービスの大きなコンセプトです。

分散しているリソースを仮想化し、ユーザーにとってそれが一つに見えるようにするプラットフォームを目指し、技術開発を行なっています。

例えばクラウドでは、我々のつくったプラットフォームに、様々な企業がアプリケーションを持ち込みで参加し、ユーザーにとって面白いアプリケーションが生まれるという相乗効果も期待できます。その場合、ISV のように外部の人が自由にアプリケーションを持ち込める開発環境をつくるのが、一つの鍵になります。他にも、IDC のデータベースの容量を、自由に拡張できるようにするなど、様々な要素技術を開発しています。

Q: 富士通は、IA サーバを海外戦略の要として販売していこうとしていますが、お客様にとっての差別化ポイントは何ですか？

A: 現在、お客様に最も求められているのは、簡単に運用ができることです。ブレードサーバでは、特に、システムのセットアップ、コンフィグレーションに手間がかかります。SE や CE が訪問しなくても、簡単に動き、問題が発見できることが、お客様から求められています。

また、バックプレーン技術も IA サーバの重要な差別化ポイントです。ブレードサーバは実装密度の高密度化、省電力、高速性が求められており、これを解決するために、業界で初めてバックプレーンで 10Gbps シリアルを直接駆動させました。これによって、消費電力は従来の 2 分の 1 となりました。また、将来の製品に向けて、40Gbps の高速転送速度を実現する送受信回路の開発に成功しました。

以 上